

和歌山市の

ものづくり物語

- 1 ニット
- 2 機械金属
- 3 鋳物
- 4 縫製
- 5 織物
- 6 製材
- 7 化学
- 8 建具
- 9 染色
- 10 洋家具
- 11 皮革
- 12 和家具

和歌山市のものづくり物語

先人たちのあふれる情熱や絶え間ない努力によって躍進してきた和歌山市の工業。ものづくりの技術と精神はこの地に根付いて受け継がれ、多岐にわたる分野に発展し、今日では世界に羽ばたくグローバルな産業にまで展開しています。和歌山市のものづくりストーリーが今後も未来のページを重ねていくために、歴史や背景、特徴を紹介し、その魅力をひもといていきます。

重化学工業と地場産業の二極構造を背景に進展

和歌山市の工業は、鉄鋼、化学などの重化学工業と、古くから地域に根ざした中小企業を中心とする繊維、木工、皮革や機械金属等の二極構造になっており、それぞれ恵まれた自然条件と卓越した生産技術により進展を続けてきました。現在、国際競争の激化や市場ニーズの多様化など、さま



ざまな状況変化の潮流の中、鉄鋼、化学などの基礎素材型産業は、産業構造や企業活動等も視野に入れた新たな変革を迫られています。また、繊維や皮革、木工等に代表される地場産業においては、若年労働力・技能労働力の不足、生産設備の老朽化など、経済環境で厳しい一面もあります。



新しい産業戦略で、ものづくりの活気を取り戻す

しかし、本市企業には独自の技術力を活かして成長し、新しい基幹産業として期待される企業もあります。これらの企業は、地域における技術力の向上や雇用に大きな役割を果たしています。また、本市には、関西国際空港に近接し、港湾を擁するという地理的優位性や自然環境に恵ま



れているという特性があります。本市では、これらの特徴を活かし、平成28年3月に策定した和歌山市産業振興ビジョンに基づき、産業活力拠点の整備、総合的な企業支援体制の強化、立地優遇措置の拡充、ものづくりの高付加価値化などに取り組んでいます。



和歌山市の未来を拓いた人々

和歌山市出身で、その特異なる才能で製造業の歴史を変えた偉大なる5人の先人たち。先見の明を持って、新しい分野をクリエイティブしてきた偉人たちの功績やスピリッツは、今も次世代に受け継がれ、ものづくりの新しい未来をリードしています。



日本の化学工業界を先導したパイオニア

由良浅次郎

ゆらあさじろう
1878年～1964年

化学工業の祖と称される由良浅次郎は、1878年に和歌山市本町

に位置した紀州ネル染色業の五男として誕生しました。大阪の工業高校で色染を学んだ後、和歌山市で捺染加工業を自営。1941年第一次世界大戦の勃発により、海外からの染料の輸入が途絶え、日本の染色業界が存亡の危機に陥りました。由良は染料の主原料であるアニリンの製造を決意し、試行錯誤の末、国内初の製品化を成功させました。1917年に由良染料を設立し、同年12月に化学工業博覧会のコールタール染料の部で「金賞牌」を受賞。日本の化学工業界を主導する企業として広く認知され、和歌山の染料工業は急速な発展を遂げました。

世界的企業に発展させた“経営の神様”

松下幸之助

まつしたこうのすけ
1894年～1989年

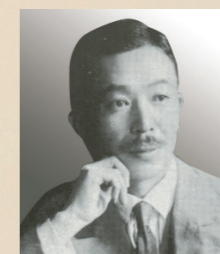


1894年、名草郡和佐村千旦ノ木(現和歌山市禰宜)生まれ。学歴も資力もないところから、1918年に独力で松下電器器具製作所を創設。アタッチメントプラグ(電気器具)をはじめとした、家庭生活を向上させる画期的な製品をこの世に生み出しました。1935年には松下電器産業(現パナソニック)を設立し、取締役社長に就任。電球の製造に着手するほか、次々と新しい家庭電化製品を世に送り出し、家庭電器や無線電機の製作普及にも努力を重ね、世界的企業に発展。優れた実業家として、今も“経営の神様”と呼ばれています。和歌山城の再建など多大な援助を行い、1960年に和歌山市名誉市民の称号が贈られました。材育成にも力を注ぎ全国グランプリで、数多くの入賞実績を残しています。全国的知名度が高いことから、他府県からの技能研修も受け入れています。

ビタミンAの分離抽出成功で、日本人の栄養状態を改善

高橋克己

たかはしかつみ
1892年～1925年



1892年、海部郡木本村(現和歌山市木ノ本)生まれ。1914年に東京帝国大学農科大学農芸化学科に入学し、同大学院卒業後に世界で初めてビタミンAの分離抽出を成功させました。さらに、ビタミンAの性質や生理作用についても研究を重ね、夜盲症や肺結核など多くの病気の治療に効果があることを発見し、「理研ビタミン」の名称で栄養剤として商品化。当時の日本人の栄養状態を画期的に改善させました。1925年に農学博士の学位が授与されましたが、8日後の2月8日、32歳の若さで病のため死去。人々の健康のために尽くした短い生涯を終えました。

国産の楽器作りに励み、日本の音楽文化を発展

山葉寅楠

やまはとらくす
1851年～1916年



楽器事業や音響機器事業を展開する企業、ヤマハの創業者。1851年に和歌山城下に生まれ、父が紀州徳川藩士の天文係だった影響から、幼少のころから西洋の機械技術への関心が高かったといわれます。後に大阪で時計作りを学び、その後医療機械の修理技術者になりました。1884年に静岡県浜松市に移り住んでからは機械器具全般の修理を請け負い、その中にアメリカ製オルガンがありました。「将来、日本でもオルガンが普及する」と考えた山葉は、オルガン製作に取り組み、日本初のオルガン製造に成功。1897年に日本楽器製造を設立し、初代社長に就任した後は、グランドピアノの国産化も実現させました。

国産飛行船初の往復飛行を実現させた航空先覚者

山田猪三郎

やまだいさぶろう
1863年～1913年



日本航空界に大きな影響を及ぼした山田は、1863年、紀州藩士の子として和歌山城下の七軒丁(現和歌山市堀止西1丁目)で生まれます。1900年に係留気球を考案、「山田式風式気球」と名付けられ、日露戦争では日本軍が採用しました。その後、飛行船を次々と製作し、1911年の3号船は20kmの飛行距離を記録。これにより、自由飛行できる飛行船は実用化され、これらの飛行船は山田式飛行船と呼ばれるようになりました。2016年には、国際航空連盟が定める世界の航空業界の功労者として殿堂入りを果たしています。

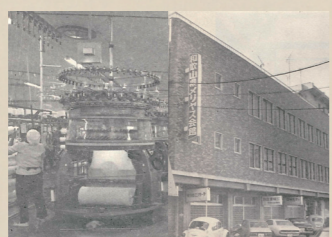
ニット物語



丸編ニット生地生産国内1位を誇る和歌山。高品質で独特の風合いが評価され、国内外の高級ブランドに利用されています。和歌山ニット工業組合、和歌山ニット商工業協同組合により産地ブランド認定制度の一環として、2016年にはオリジナルブランドロゴ、「WA Knit made in WAKAYAMA, Japan」が誕生。和歌山で生産され、国内の染工場加工して縫製されたニットのみにもロゴをタグ付けし、産地のブランディングをアピールしています。

大正末期に全国一の丸編メリヤス地に

ニット産業の歴史は、1909年に和歌山市の楠本藤楠氏がスイス製丸編機5台を導入して事業を開始したことから始まりました。大正時代には第一時世界大戦を契機に、紀州ネルの起毛加工方法を応用した綿メリヤスが飛躍的に発展を遂げ、全国一の丸編メリヤス地に。昭和30年代に入ると、「ジャージ生地」と呼ばれる合織メリヤス生地が開発。全世界に輸出されるとともに、東京オリンピックの日本選手に着用され、名声を博しました。



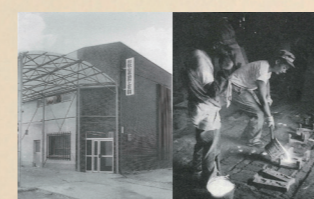
「和歌山ニット」をブランド化して、国内外に魅力発信

和歌山のニット産業は100社以上の企業が活動し、日本の丸編ニットの約40%を算出。染め、縫製、撚糸など関連産業が近隣に存在し、小ロット、他品種、短納期に対応できる産地として、アパレル業界で評価されています。また、生地の製造のみならず、生地の企画から製品づくりまで手掛ける企業もあり、各社それぞれが技術的ノウハウを自社作品に反映させ、新たなマーケティング戦略を手掛けています。



鑄型に溶かした金属を注ぎ、日用品や機械部品をつくる鑄造業。和歌山市の鑄物の歴史は、明治初期に必要な鍋や釜などの日用品を生産したことから始まりました。現在、和歌山県鑄物工業協同組合に所属する和歌山市の鑄造所は2つあり、優れた加工技術を元に、大手メーカーからの発注や単品での依頼などさまざまなニーズに対応。現場では高い技術を持った外国人鑄物工が活躍するなど、グローバルな一面も持っています。

紀州ネルの工場機械の鑄造から機械鑄物業が誕生



和歌山における鑄物業の起源は、明治初期に和歌山市内に鍋や釜などの日用品を作る鑄物屋が数軒あったことに始まるといわれています。

1893~1894年ごろ、綿ネル工場の機械類を鑄造したのが、和歌山における機械鑄造のはじまりとされています。その後、船舶用内燃機鑄物の生産もスタートしました。1935年ごろには、染色整理機械、メリヤス機械の部品製造を主とする和歌山の鑄物業が確立され、戦後は繊維業界の機械需要に支えられて、順調に発展しました。

鑄物物語



クオリティーの高い鑄物づくりに日々まい進

和歌山市の中心産業として発達した繊維機械づくりが起点にあった機械鑄物業は、金属工作・加工機械、産業機械などに使われる素形材を主に製造するように発展。本市の鑄物業は日本の基幹産業のサポーター・インダス



トリーとして期待されている業界の一つです。各社で、製造技術の向上はもちろん、検査・管理を徹底する一方で、各種材質の研究開発にも怠りなく、クオリティーの高い鑄物づくりにまい進しています。

機械金属物語



地場産業と連携して、技術の革新を成し遂げてきた和歌山市の機械金属業界。独自の技能・ノウハウを持つ企業が多く、その多彩な技術は世界が認めるほどハイレベルです。地域経済をけん引する中小企業が目立つのも、この業界の特長。世界技術水準の維持やさらなる進歩のために、新技術習得を目的とした能力開発や人材確保など、各企業で技術の高度化、高精度化、新分野への展開へ向けて、日々努力を重ねています。

戦前から注目された“南海の工都”

本市は戦前から“南海の工都”と呼ばれ、繊維工業や木工業など伝統的な地場産業と重化学工業の発展とともに成長してきた製造業中核型の都市です。綿ネル業の発展に伴い、各工程である撚染・起毛・漂白部門で機械化が進められ、機械製造の技術が目覚ましく向上。特に繊維機械、製材機械、各種工作機械、精米機などが高い評価を受けています。また、精密機械関係では、写真処理機械やコンピューター制御横編機などが、国内はもとより世界各地に輸出されています。



国も認める地域経済の貢献度の高い中小企業がそろそろ

和歌山県機械金属工業協同組合は、機械金属の製造業およびその関連事業の約90事業者で構成。地域経済への貢献度が高いコネクター・ハブ企業や、独自の高い技術を有するオンリーワン企業、ニッチトップ企業などの中小企業が地域経済をけん引しています。中には、中小企業庁の「元気なモノ作り中小企業300社」や、近畿経済産業局の「KANSAIモノ作り元気企業100社」に選定された市内企業もあります。



徳川末期に紀州藩が足袋の生産を始めたことが、和歌山市の縫製産業のはじまりです。古い歴史を誇り、地場産業として長きにわたって貢献してきた縫製産業ですが、国際競争の激化や若年層の労働力の低下などにより、現在は厳しい経済環境であることは否めません。しかし、高付加価値商品を短納期、小ロットで製造するなど、さまざまな切り口で難局を乗り切る企業も多数出てきています。

紀州藩の足袋生産の奨励で、縫製業が盛んな地に

徳川時代の末期、紀州藩が足袋の生産を奨励したという文献が残されています。明治維新後も生産が盛んになるにつれて、日露戦争前後から機械化、大正時代には、動力ミシンを使った縫製業が形態を整い始め、戦後は地元生産のネル生地を素材とした寝間着の生産高が急激に伸びました。昭和30年代の高度成長の過程では、廉単価の量産一般品においては全国的な重要シェアを占めるほどに。現在では産地振興法に基づく業種指定を受けて、ファッション性の高い高品質製品の創出とともに、イメージアップにも努めています。



縫製物語



多岐にわたる商工別取扱い品

パジャマ、カットソー、ニット、紳士服、婦人服、子供服、ベビー服、寝具や雑貨一。これらの多岐にわたる縫製商品は、県内に縫製関連企業で構成される和歌山県衣料縫製品工業組合35社でカテゴリーされている商工別取扱い品です。また、独自の製品展開を図り、海外での日本製衣料品の展示会を開催し、輸出を目的に努力している企業もあるなど、業界の新たな発展を期待する動きも見られます。



織物物語



和歌山市の織物業界は1890年から約130年、幾多の変遷を経て今日に至っています。第二次大戦後、開発途上国の追い上げ等もあり、情勢は非常に厳しくなっている面もありますが、最新織機の導入など、諸設備の近代化と技術の向上を目指し、努力を続けています。またアパレル繊維以外にも、機械などに使用される産業資材用繊維など、新たな分野で活躍を見せる企業もあります。

保温力に優れた紋羽織が藩政時代の中期に誕生

気候温暖な和歌山は元来綿花の栽培に適しているため、綿織物の歴史は古く、藩政時代の中期に紀北地方に紋羽織が出現。綿布の横糸に粗紡綿糸を用い、保温力が優れた特別な織物でした。明治時代に入ると、木製の手機織機による木綿織物の生産に発展し、「紀州ネル」として全国的に有名な綿ネルの製造も盛んになりました。和歌山市の近代産業の多くは、綿ネルを中心とした関連産業で、紡績業、捺染業、染色化学工業、染色整理機械産業等、繊維に関連する諸産業の発展を促してきました。



産地を構成する各企業が連携し、和歌山から世界へ

県下の主な織物製品は、綿織物、合繊維物、スフ織物などで、生地織物ではユカタ地、シームレスオムツをはじめ、フィルタークロス、ネル生地、ガーゼ、フキンなど医療用、工業用の資材を製造しています。現在、和歌山県織物工業組合に所属する企業は11社。各企業により、長年の技術の特性を生かした織物製品が作られており、オリジナリティーあふれる自社製品の品質向上に努めています。な視野を備えた企画提案型産地への転換を目指しています。



製材物語



豊かな森林資源に恵まれた和歌山市では、古くから製材業が盛んでした。中でも材木を細かく割る小割製材技術が発展し、建具、襖材、家具といった関連の産業が古くから集積しています。近年では木造住宅の柱や梁の継ぎ手、仕口を機械で行うプレカット加工を行う会社も増え、高品質でありながらスピード化も兼ね備え、時代に適した製材の提供も確立しています。

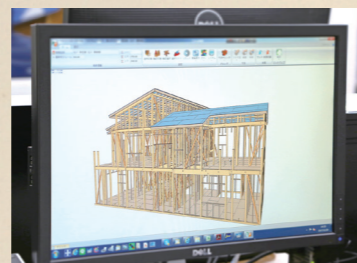
内側沿いの地域で発展していった製造業

明治20年代初期に、紀伊半島の豊富な森林資源と運材に便利な河川を有していたことから、和歌山、有田、御坊、日置、古座川、新宮などで、製材業は発展していきました。和歌山市の製材業は、北洋材や米材が入荷するようになった1919年ごろから本格的になります。戦後は戦災復興の資材供給のための乱伐がたり、国産材が枯渇。その結果、外材が輸入されるようになり、和歌山県は和歌山市水軒浜を埋め立て、水面貯木場や水面整理場、木材工業団地等を含む木材港を1967年に完成しました。



主に建築用材として求められる和歌山の製材

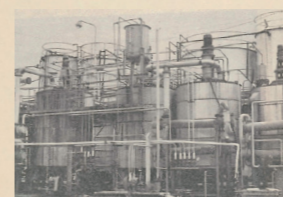
本市で製材される製品はほとんどが住宅建築用材であるため、地場産業として生き残りをかけるには、付加価値を付けた二次加工・三次加工へと転換する製造方法や、大手ハウスメーカーとタイアップしたプレカット、集成材の製造など、時代のニーズに応えられる製材業界であることが求められています。同時に、木材業界はエコマテリアルとしての木材の利用推進に努めています。



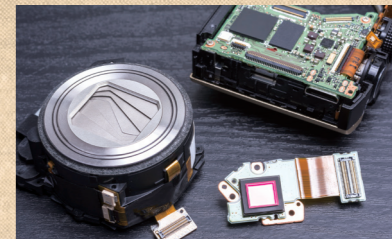
第一次世界大戦時に、和歌山市のある一人の捺染(なっせん)業者が日本で初めて、染料の原料であるアニリンの工業的製造に成功。この結果、和歌山市は合成染料の発祥の地としての地位を築くとともに、日本の合成染料発展に大きく貢献し、業界におけるトップシェアを占めるに至りました。その後も多岐にわたる化学製品の製造が開発され、医薬・農薬、高分子原材料などファインケミカル分野にも生産領域を拡大しています。

化学工業のパイオニア、由良浅次郎

1914年に第一次世界大戦が勃発し、ドイツから合成染料の輸入が途絶え、日本の染料業界は存亡の危機に陥りました。捺染加工業「由良浅染工所」を自営していた由良浅次郎は、試行錯誤の末、国内初のアニリンの製品化に成功。続いて、石炭酸(フェノール)の製造も実現して、日本の化学工業界を主導し、和歌山の染料工業を急速に発展させました。本市の化学工業業界には現在もそれぞれ特徴を持った製品を輩出する企業が数多くあり、由良のパイオニア精神を今も受け継いでいます。



化学物語



宇宙関連機材や航空機に使用される製品も

ルーツを持つ和歌山市だけに、化学工業は本市の地場産業をリードしてきた業界の一つ。アニリンの工業的合成の実現から現在に至るまで、染色をはじめ、石炭酸や界面活性剤など、多様な化学製品の開発・製造が行われています。また、多くの中小企業が活躍する本市の工業業界では、多分野において独自の技術を開発し、繊維、医療、農薬、電子などの分野にも進出。さらに、航空機や宇宙分野などに技術フィールドを拡大して、汎用製品から多品種少量生産による高付加価値製品へと移行するなど、著しい進歩を遂げつつあります。



ドアやふすま、障子など、建築物内の部屋や出入り口を間仕切り、開閉する役割を持つ建具。弥生時代の遺跡から出土されるほど、日本の建具の歴史は深いものがあります。林業が盛んな和歌山では、明治初期から建具の製造が行われており、一大産地としてその名を馳せました。紀州生まれの建具は、室内の調湿機能やナチュラルな質感など木の特性を生かした木製建具を中心に、機能性はもちろんデザイン性にも優れたものが、現在も多々そろいます。

建具物語



木の国の豊かな自然の恵みと立地条件で一大産地に

古来「木の国」と歌に詠われるように、杉や桧などが繁茂し、林業が盛んな地である和歌山県。文久年間(1861~1863年)には、和歌山城下に大工の下請け職人として5、6軒の建具業者があったとの記録も残ります。建具業として独立した業種になったのは明治に入ってから。紀の川を利用して運ばれる吉野杉や紀州松の端材を使って作ったのが始まりといわれています。木材の集荷地として栄え、大阪などの大消費地に隣接する立地条件に恵まれ、和歌山市は建具の一大産地となりました。



職人の技と現代デザインが融合で、メイドイン紀州の魅力を発信

和歌山県は和・洋建具の生産地であり、品質、生産量ともに全国的に高い評価を得ています。中でも、和歌山市は県下の建具業者が集中する地域で、そのほとんどが家内工業。大手メーカーなどの下請けを担う一方で、独自のブランド製品を手掛ける会社も数社そろいます。例えば、職人の技と現代デザインが融合した天然木の障子製品が「グッドデザイン賞」を受賞するなど、さまざまなスタイルで、紀州発の新しい建具の魅力を発信しています。

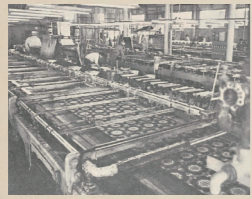


染色物語



1889年ごろから手捺染による技術が伝えられ、先駆者のひたむきな研究と機械の改良、そして最新の設備の導入により、和歌山市の地場産業として確立された染色業界。現在、本市で加工されている高級捺染品、無地染品、起毛品などは、国内はもちろん、世界の国々へも輸出され、日本の染色技術として高く評価されています。そして、さらなる発展のために、IT技術導入による生産効率のアップなど、業界ではさまざまな取り組みも行われています。

徳川時代の防寒着としての紋羽織が始まり



和歌山の染色の始まりは紀州ネルといわれ、徳川時代中期に防寒着として紋羽織が登場。これに松の葉を束ねて毛をかき出したものが紀州藩の兵服として作られました。産地になったきっかけは、1886年に全国に先駆けて作られた染色教習所でした。1900年には染色会社が誕生し、綿ネルからモスリン、更紗、ポプリンへと対象を拡大、和歌山の代表地場産業に発展。昭和50年代後半から、フラットスクリーンの捺染機によるプリントが主になり、高品質な寝装、婦人服地と、多種多様な製品が加工されるようになりました。

最新の捺染技術や環境問題…、時代に即した産業革命

和歌山で加工されている製品は、素材は綿、スフ、合繊などの短繊維をメインとし、用途は高級寝装品、服地、カーテン、肌着など多種多様にそろいます。プリント方法として、フラットスクリーン捺染、ロータリー捺染が主流でしたが、近年はインクジェット捺染の導入もされています。小ロット短納期対応が可能であるという特徴が時代に合致するだけではなく、スクリーン捺染に比べ、エネルギー消費が少ないという長所も。また、排水による環境問題に対処するなど、時代に即した持続的な発展を目指します。



洋家具物語



高い技術とデザイン性を誇る和歌山の洋家具。その理由の一つは業界が一丸となって行う人材育成。家具職人が技術検定試験にパスするよう、サポート体制を組み、多くの技能士を誕生させています。その結果、国内外の大会で優勝や入賞を収めるなど、“和歌山のものづくり”を作品で体現。伝統技術や技法を若い世代が確実に受け継ぎ、時代によって機能もデザインも変化する家具市場のニーズに対応しています。

地場産業として定着させるため、大正初期に工業高校に家具科を配置

和歌山県の洋家具業界は、大正期より急速に洋風化された公共建築物、民間企業施設に相応する洋式室内装備品の需要が必要とされるに至り、在来の木工指物師が先進製品の模倣から技術を習得し、製作したのが始まりといわれています。また、洋家具先進地の神戸や大阪に子弟を修業に出すなど本格的な取り組みを試み、行政でも木工県として技術の向上を図るべく、1914年に県立工業高校（現、県立和歌山工業高等学校）に家具科を配置して人材育成に意を注ぎ、それらの人材が地域に定着して地場産業の基礎をつくりました。



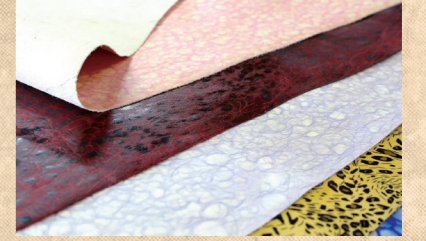
全国的に知名度が高い和歌山の洋家具の技術

高度成長期の波に乗り、順調に発展していった和歌山の洋家具業界。1977年には木工家具製造企業や関連企業15社が集積する「和歌山洋家具団地」も形成され、操業を開始しました。時代とともに生活環境が多様化するにつれ、オーダーメイドの家具のニーズが高まり、一部は建築と融合したトータルインテリアへと移行しています。「和歌山県洋家具商工業協同組合」では、人材育成にも力を注ぎ全国グランプリで、数多くの入賞実績を残しています。全国的知名度が高いことから、他府県からの技能研修も受け入れています。



和歌山市の伝統ある地場産業の一つである皮革産業。兵庫、東京に並び、和歌山は日本の製革産業の三大産地に数えられています。企業数は少ないものの、一社で製作管理するため、各社それぞれが特色のある皮革製品を生み出しているのも“和歌山レザー”の特長。そのため、業界内の結束は固く、和歌山県製革事業協同組合が中心となり、国内外の展示会参加や、地域への産業に関する情報提供など、積極的なPR活動を行っています。

皮革物語



製革・製靴の技術を日本でいち早く取り入れた和歌山藩

和歌山市の皮革産業の源流は、慶長年間（1596年～1614年）にまで遡るといわれています。近代皮革が誕生したきっかけは、明治2年（1869年）の軍制改革の際、和歌山藩が皮革製の兵用具や軍靴の自給を目指したことです。その後、紀州靴の評判は高まり、大正時代後期には民需を基盤とした生産高の上昇も見られるようになりました。終戦後は新しい染色方法を開発するなど技術革新に務め、1949年に和歌山県製革事業協同組合を設立し、国内三大産地に名を連ねるほどの発展を成し遂げました。



分業よりも専門性に特化した、高品質な革づくりの地

和歌山は一社で全行程を管理する企業が多いことが特長。取り扱う革素材、なめし方、加工と仕上げ方法、またタンナー（革職人）の技術や経験など、各社で独自の革素材が製造されています。和歌山県製革事業協同組合は、東京や上海など国内外のレザーフェアに定期的に参加し、国内外でビジネスの場を広げています。また、和歌山市で「和歌山レザーフェスティバル」を毎年開催し、皮革製品の展示即売会を通して、県産品の啓発活動に務めています。



1987年に通産省（現、経済産業省）により、国の伝統的工芸品に指定された紀州箆笥。和歌山市が産地として指定されています。江戸時代末期には製造技術が確立され、生産が行われていたといわれる和家具を次世代へつなげていくために、老舗店が集う紀州桐箆笥協同組合では、後継者育成や技法の伝承、斬新なアイデアを加えた新商品のデザイン・製造など、時代に即した伝統的和家具の新たな道を切り拓いています。

和家具物語



「南紀徳川史」に記録が残る長持ちが和家具の始まり

徳川紀州家の歴史をつづった「南紀徳川史」によると、当時和歌山城下には長持ちなどの箱物を製作する技術があったことがうかがえます。箆笥造りに関しては、武家以外の階級社会でも箆笥はすでに婚礼調度品であったことが見受けられます。江戸時代末期には、製造技術が確立し、生産が行われていたと思われる、和歌山市の箆笥造り。明治時代には、大阪圏の需要を満たす地回り産地として発展を続けると同時に、地元需要も増加していきました。1953年からは、ほとんどの工場が桐箆笥の製造に移行していきました。



世代を超えて引き継がれている和家具

紀州箆笥は、桐材特有の上品な木肌と美しい木目を生かしているのと同時に、軽くて耐湿性にも優れているため、特に衣服の収納に適しているといわれています。現場で長年培われた経験と勘により、伸縮や狂いが少ない箆笥として、世代を超えて引き継がれている和家具の一つです。現在は昔ながらの技法が反映されたモダンなテイストのインテリア小物家具など、新しいスタイルの紀州箆笥も製造。また、極みの技術で成り立つ地場産業を地元で広めるべく、地元の小学生を対象とした製造体験も実施しています。



和歌山市 産業まちづくり局 産業部商工振興課工業振興班

〒640-8511 和歌山市七番丁23番地

【TEL】073-435-1233 【FAX】073-435-1256

【Mail】shoko@city.wakayama.lg.jp

【URL】<http://www.city.wakayama.wakayama.jp/>

※掲載データは、2018年1月の時点のものです。変更される場合がありますので、ご利用の際は、事前にご確認ください。